

令和元年6月27日現在

機関番号：32616

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02428

研究課題名(和文) 戦間期フィンランドにおける「大フィンランド」表象とその利用

研究課題名(英文) The representations of 'Greater Finland' and its use during Interwar Period in Finland

研究代表者

石野 裕子 (ISHINO, YUKO)

国土館大学・文学部・准教授

研究者番号：70418903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦間期フィンランドにおける「大フィンランド」表象が「大フィンランド」実現を目標に掲げた団体の著作物だけでなく、一般誌や全国新聞の記事からも読み取ることができることを明らかにした。また、戦間期フィンランドにおいて「大フィンランド」を支持する世論が形成されていった過程を指摘し、その支持基盤として民族叙事詩『カレワラ』の存在やフィンランド人とカレリア人の「近親民族」思想の利用を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまでの研究で注目されてこなかった一般誌や全国新聞の記事を分析し、それらの記事が読者に「大フィンランド」を支持させるような文化表象を多く用いていたことを指摘できた点、および戦間期フィンランドの世論形成過程を分析した点に学術的意義が見出せる。また「大フィンランド」を解説した一般書の研究成果、「大フィンランド」の文化的表象をわかりやすく説明した講演会は広く社会的意義が見出せる。

研究成果の概要(英文)： This research reveals the representation of 'Greater Finland' that has already appeared not only in the publications of other organizations aiming for the realization of 'Greater Finland' but also in popular magazines and national newspapers in Finland during Interwar Period. This research also discusses the processes of the formation of public opinion in favor of 'Greater Finland' during Interwar Period, and furthermore this research reveals the use of the national epic poetry Kalevala and the kindred idea between Finns and Karelians as a base support for 'Greater Finland'.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ナショナリズム ヨーロッパ 民族文化 フィンランド 文化表象

1. 研究開始当初の背景

近年の研究で明らかにされてきたように、現在のヨーロッパ統合につながる地域構想が様々な形で戦間期のヨーロッパ各地で発生し、ヨーロッパ統合の再編案も多様性を帯びていたことは周知の事実となってきた（板橋『中欧の模索』2011、『思想』No.1056,2012 など）。しかし、その一方で、第一次世界大戦後、ヨーロッパに誕生した新興独立国家において膨張思想に支えられた地域構想も多様性を帯びつつ登場し、国内の大きな支持を得ることとなる。すなわち、汎ヨーロッパ主義と並走する形でこのような地域構想がヨーロッパ内において語られていたのであった。新興独立国家の一国フィンランドにおいてもその例外ではなかった。

戦間期のフィンランドでは、「大フィンランド」思想と呼ばれた地域構想が知識人のみならず、民衆の間でも共有され、圧倒的な支持を得るだけでなく、政治に影響を与えるまで大きな思想潮流に成長した。「大フィンランド」は、そもそもフィンランド人の「近親民族」との連帯思想から端を発した地域構想であり、独立以前のロシア帝国統治時代から一部の知識人の間ですでに共有されていた思想であった。この連帯思想は、19世紀中葉に発生した「カレリアニズム」と呼ばれる芸術文化運動と連動する形でフィンランド社会に浸透していくことになる。特に、カレリア人との連帯思想は、カレリア人が主に居住していたロシア・カレリアでフィンランド民族叙事詩『カレワラ』が「発見」されたということから、カレリア人とフィンランド人との「連帯」が一層主張されるようになり、その主張は詩や文学、旅行記等のルポルタージュといった形で表現されていった（石野 2010）。

その一方で、この連帯思想はフィンランドが政治的な危機にさらされた時に、膨張的色彩を帯びようになる。19世紀終わりにロシア帝国のフィンランド統治方針が変更されたことによって、自治を剥奪される危機を感じたフィンランド人知識人たちは、防衛的見地から「近親民族」が居住する地域ごとフィンランドに含めようとする膨張思想、すなわち「大フィンランド」を構想するようになる。その膨張思想は、1917年の独立直後に勃発した内戦期において、武力でもって「近親民族」の居住地を獲得しようとする動きへとつながっていった。その企みは失敗に終わったが、独立以降も「大フィンランド」思想は潰えることはなく、フィンランド社会に浸透していき、「大フィンランド」の実現を目標に掲げる民間団体も設立されるなど、活気を帯びた。

この「大フィンランド」思想の普及に使われたのが、19世紀中葉に発生した芸術文化運動で生まれた文化的表象であった（石野 2012）。しかし、一方で、「大フィンランド」を表現する詩や文学も新たに生み出され、両者が混じり合う形で「大フィンランド」文化という新たな表象文化が登場したのである。例えば、1929年に発表されたアールノ・カリモの『小丘の夜（Kumpujen yö）』は、子ども向けに書かれた歴史小説であるが、同時に「大フィンランド」文化の小説とみなすことができる（Silvennoinen, “Kumpujen yöhön eli kuinka historiallinen muisti vääristyi”, 2014）。また、「大フィンランド」の実現を目標に設立された民間団体も詩集を出版し、「大フィンランド」思想をフィンランド社会に普及させようとするなど、戦間期において様々な文化的主体から「大フィンランド」の表象が盛んに行われていったのである。

私はこれまで、「大フィンランド」思想の誕生と変遷、および「大フィンランド」思想と民族文化との関係を民俗学者、歴史学者といった知識人の言説から読み解き、彼らの言説が「大フィンランド」思想の論理を補強するものとして、政治的に利用されていった、あるいは自ら進んで政治的行動に関与していった経緯を明らかにした（石野: 2011,2012）。また、戦後フィンランドにおいて「大フィンランド」思想の影に隠れていたフィンランド文化に内在した「スラブ的要素」についての言及がなされていった過程を指摘した（石野: 2013）。本研究では、それらの研究成果を基にしながらも、戦間期フィンランドにおいて新たに生み出された「大フィンランド」文化という表象文化に焦点を当てることで、戦間期ヨーロッパにおける新興国家の地域構想と文化の関係を明らかにし、さらには戦間期の「小国」が描いた国家及び民族のあり方を再考した。

2. 研究の目的

本研究は、戦間期フィンランドにおいて全盛を誇り、国内外の政治方針に大きな影響を及ぼした膨張思想「大フィンランド」が文学、詩といった文化、「大フィンランド」実現を目的に活動を展開した民間団体が発行した冊子等においてどのように表象されたのか、さらにはそれらの表象が人々に認知され、共有されていった過程を明らかにすることで、戦間期ヨーロッパの新興独立国家における地域認識および民族意識を再検討することが目的であった。特に、フィンランド領域の「外」にあるロシア・カレリア地方を「大フィンランド」の領域とする根拠として、どのような文化表象が利用されたのかに注目することで、戦間期ヨーロッパの新興独立国家における政治と文化の関係を検証した。

3. 研究の方法

本研究は以下の3点の方法で行った。

(1) フィンランド文学協会図書館及び国立図書館にて、戦間期に出版された雑誌、新聞に表象された「大フィンランド」文化の調査及び分析

(2) 上記で収集した資料において描かれた「カレリアニズム」の「近親民族」像の再利用に関する調査及び再利用された文脈についての分析

(3) ヘルシンキ大学図書館及び労働運動図書館にて、「大フィンランド」実現を目指した民間団体発行の会報誌、冊子等に描かれた「大フィンランド」文化の調査及び分析

以上の資料を収集・分析するために、大学の夏季休業期間を利用してフィンランドのヘルシンキに短期滞在し、フィンランド文学協会図書館、戦間期の国内雑誌、新聞が所蔵されている国立図書館において、戦間期に出版された文学、詩においてどのくらい「大フィンランド」が表象されているかを調査した。しかし、当初想像していたより対象分析とする文学や詩は少なかつたため、新聞、雑誌を中心とした調査に切り替えた。最初は「大フィンランド」思想の主な支持層を讀者とする保守系の新聞、雑誌、次に一般誌と全国新聞の「大フィンランド」表象の分析を行った。後者は想像以上に対象資料が多かつたので、2018年度は一般誌『スオメン・クヴァレヒティ』を中心に資料の収集を集中的に行った。

次に(1)の対象資料を用いて、独立以前の芸術文化運動「カレリアニズム」で描かれた「近親民族」像の再利用に関する調査を行った。特に「近親民族」との連帯という表象が、「大フィンランド」実現の必要性を訴えるためにどのような文脈で用いられているのかに注目して分析した。再利用の調査にあたっては、事前に「カレリアニズム」で描かれた「近親民族」像について整理を行うが、「カレリアニズム」に関しては先行研究が豊富だったので、先行研究での分析を事前にまとめる作業を行った。

以上のような作業と並行して、戦間期フィンランドにおいて「大フィンランド」実現を目指して活動を展開した民間団体が存在するが、その中で最大規模を誇り、かつフィンランド社会において最大の影響力を有した団体である「カレリア学徒会(Akateeminen Karjala-Seura)」に注目し、会が発行した会報誌及びプロバガンダ冊子に描かれた「大フィンランド」の表象を調査した。本研究では、カレリア学徒会のアーカイブがあるヘルシンキ大学図書館特別資料室及び労働運動図書館の資料を閲覧し、必要な資料の収集を行い、文化的側面から見たカレリア学徒会についての分析を行った。最終年度では期間内に調査した結果を研究成果としてまとめる作業を行った。

4. 研究成果

戦間期フィンランドにおいて膨張思想といえる「大フィンランド」の表象を比較検討するために、まずは「大フィンランド」実現を目標に掲げたカレリア学徒会の地域構想を会の中心人物であったエルモ・カイラの思想を中心に分析し、論文として発表した。彼にとって「大フィンランド」は祖国フィンランドと同様であり、ソ連(ロシア)領カレリア抜きで1917年12月にフィンランドが独立したことは間違っていたとする彼の論理と戦間期国際秩序との関係を明らかにした。また、叙事詩『カレワラ』が「大フィンランド」表象に及ぼした影響を歴史的・政治的観点から考察し、それを日本との比較を交えてアメリカの国際学会で発表を行った。

次に「大フィンランド」表象が特別な団体内だけではなく、広くフィンランドに浸透していたことを明らかにするために一般誌『スオメン・クヴァレヒティ』に出てくる「大フィンランド」表象を戦間期の1918-1944まで全て目を通し、分析した成果を論文として発表し、学会発表も行った。以上のような研究成果は国内外では類を見ず、文化表象研究として、さらには戦間期フィンランドの国内世論と外交政治、特に対ソ連外交との乖離を指摘した時点でフィンランド史研究のみならず国際政治研究において重要な事例を提供したといえる。

本研究成果を一般社会に還元するために、2015年5月22日～8月7日まで江東区東大島文化センター講座「フィンランドを知る～歴史と文化を中心に～」において「大フィンランド」と文化を扱った戦間期の回をもうけた。2015年9月28日には北欧建築・デザイン協会(SADI)月例会講演で、2019年2月28日には日本フィンランド協会2月例会で本課題と関連した発表を行った。また、2017年10月には新書『物語フィンランドの歴史』、事典『北欧文化事典』を刊行した。前者ではこれまで日本ではほとんど触れられることがなかった「大フィンランド」思想とその影響について論じることができ、後者では「大フィンランド」と文化表象についての項目を執筆することができた。

以上のように、戦間期フィンランドにおける「大フィンランド」表象とその利用について検討するという当初の課題はほぼ達成したといえる。しかし、「大フィンランド」という言葉を用いずに表象された文化についての分析対象が一定の刊行物にとどまった点など積み残した課題もある。今後は、国家概念あるいは国家構想と連動されて考察されてきた「大フィンランド」の夢が断たれた第二次世界大戦以降、フィンランドはどのような国家像を希求したのか、そしてどのようにそれは表象されていったのかについて考察することで本研究につながる研究をさらに発展させ、さらには文学研究ならびに国際関係研究に寄与したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者は下線)

[雑誌論文](計2件)

(1) 石野裕子「フィンランドにおける『大フィンランド』の文化的表象-大衆誌『スオメン・クヴァレヒティ』(1918-1944)の分析を通して-」『国士館人文学』51巻、2019年3月、57-80

頁。(査読あり)

(2) 石野裕子「『大フィンランドは祖国と同様である』-エルモ・カイラとカレリア学徒回の地域構想-」『地域研究』16巻1号、2015年11月、173-195頁。(査読あり)

〔学会発表〕(計2件)

(1) 石野裕子「戦間期フィンランドにおける『大フィンランド』の文化的表象」バルト＝スカンディナヴィア研究会、2018年12月8日、早稲田大学。

(2) Yuko Ishino, 'The Acceptance of the Kalevala in Japan: From historical and political perspective', Society for the Advancement of Scandinavian Study Annual Meeting 2016, 2015年4月30日、New Orleans

〔図書〕(計2件)

(1) 石野裕子『物語フィンランドの歴史-北欧先進国「バルト海の乙女」の800年』中公新書、2017年10月。

(2) 北欧文化協会、バルト＝スカンディナヴィア研究会、北欧建築・デザイン協会編『北欧文化事典』2017年10月。

〔その他〕(計3件)

(1) 石野裕子「戦間期における『カレワラ』とロシア・カレリアの表象」日本フィンランド協会2月例会、2019年2月28日。

(2) 石野裕子「叙事詩『カレワラ』と創造されたフィンランド民族文化」北欧建築・デザイン協会(SADI)月例会講演、2015年9月28日。

(3) 石野裕子「フィンランドを知る～歴史と文化を中心に～」江東区東大島文化センター、2015年5月22日～8月7日。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。